

東京バッハ合唱団 月報

[第 728 号] 2023 年 2 月号

〒156-0055 東京都世田谷区船橋 5-17-21-101

Tel: 03-3290-5731 Fax 専用: 03-3290-5732 郵便振替: 00190-3-47604

Mail: office@bachchor-tokyo.jp http://bachchor-tokyo.jp/

BACH-CHOR, TOKYO

Monthly Newsletter No.728

February 2023

5-17-21-101 Funabashi,
Setagaya-ku, Tokyo

2023年の正月、東京は静かな年明け

大村 恵美子 (主宰者)

死後は「天国」しか存在しない。

「地獄」は、架空の想像に過ぎないから、そんなところに墜ちて、絶望ずくの、一方的に無限定に受けつづける苦悩もだれ一人味わうことがない——。

歳を重ねて、地上の人生の終わりが近づくとつれて、私の心の内に確信できるようになったのが、以上のようなことです。

では「地獄」は、ただの「おどし」のための作りごとだったのか？ 私は、人間が人生を歩んでいる間に、自分自身への不信も、他人からの敵意も、ちゃんと存在して、それを無反省のままぶつけ合うような生き方こそが、「地獄」と形容するような状態なのだと考えます。「地獄」は、死後に存在するようなものではなく、自分たち自身が造り上げる、馬鹿馬鹿しい生き方のことだというのが、私の実感なのです。

殺し合いをする、これが人間の行動の中の最低のもので。時々、歩きながら、綺麗な草や花を、憎々しげに力を入れてボキボキ抜いたり切ったりして捨てていく人（子どももおとなも）がいます。また言いがかりをつけて、見知らぬ他人にケンカをふっかけたり、殴り合いを挑発したりする、強がり人間もいます。

この手の人達は、まず自分が自分に納得できないで、そのトバッチリを、偶然ゆきがかかりに出くわしたモノやヒトに、無意味に突きつけるわけで、早く言えば、自分の不機嫌をそのまま、偶然出遭ったモノやヒトに無意味につきつけるてしまうような、精神的に弱点のある、したがって、場合によっては医学的手当ての必要な人たちなのでは。

そう思うと、被害を受けるほうも、相手に、カッとやって喧嘩を始めるよりも、なんとか人格者にやさしくなだめてもらうとか、周囲の人々が口を揃えて、その異常性に気づかせてあげるとか、すべきなのでしょう。

それでも、東京のような都会の住人たちは、いちいちトラブルに巻き込まれるのを面倒がって、本人との出会いそのものを避けてしまい、無視してしまう。ちょっと食い違いを感じると、すぐ関係を断って、結果的には、何の問題も感じない、ラクな人たちばかりとの顔合わせに限るようになる。つまり、違和感の感じられるような人たちとは、関係を作らないようにひたすら努力する——。



■早春・ユキワリソウ (撮影: 千葉光雄)

国内ではいちばん住居者の多い東京の人間が、年始にさえも、こうして静かに暮らせるのも、在京者の私たちが、常日頃、このように、他人にはよそよそしく付き合うすべを心得て生きているからなのでしょう。

それでOKなのでしょう？ どうしていけない？ 何の問題があるのか？

ここからが、実は本題なのだと私は思うのですが、私はこのところ、昔の若い頃の、知識欲旺盛な頃に読み続けた、当時の文章が、全頁にひとつも改行のないような、ピッチリと手堅い意見提出ばかりで、驚くばかりなのに気付き、またその反対に、今現在の読み物には、略ローマ字だけの名詞を幾つも重ねたような、極端に短くした文章がハヤっていて、私など何も分からず、「なんの略字？」と、いちいち調べても理解に苦しむ毎日です。

だから、人間関係も静かで平穏だと言ってもまるで内容のハッキリしない、「あれはそれですよ」「そうそう、それはあれですから」みたいな、奥行きのあるでない会話で済ますようになったからなのでは？

「いまの東京生活は、これで済んで、みんな略式問答を心得て、長々としゃべらなくても、カンタンな略式表現だけで、簡素に通じ合っている」——これが、もし、全国一の大人口の東京生活者の住み方だとしたら、人間としてずいぶんお粗末な内容になったもの、と反省しなければならないのではないのでしょうか。

(2023/1/9)

月報 2023 年 1 月号 CONTENTS

- ・創作「夜明けの靴下」(椿 周) …p. 2
- ・創立 60 周年の 1 ページに在籍して (大切幸一) p. 3
- ・連載: 退屈するのはいそがしい [24] (大野博人) p. 4

夜明けの靴下

椿 周 (つばき・あまね、チェロ奏者)

白髭の御老人は、今年も赤鼻のトナカイの力を借りて師走の空を飛び回るだろうか。

まだ小学校1年生にも満たないアレは、気が早いというべきだろうか、黒いユニクロの靴下を胸に抱きしめながらすぐ横のベッドですっかりと眠りこけていた。その寝顔の可愛さと言ったら……。まあそれはいい。23時を回る今、私はその寝顔を見つめながら色々と考え込んでいる。私の目の前には、明日歌うはずのカンタータの譜面が。

そう。私はBWV 147のコラールの歌詞の意味が理解できず、小一時間ほどぐるぐると考え込んでいる。何度も歌ってはいるから、音はわかるのだけれど。

私は、高等学校を終えてすぐに就職の道についてた身で、そのためか第三外国語というものに触れる機会がなかった。今の時代、インターネットで何だって学ぶことができるじゃないか。そう言われるのはわかっている。そうなのだけれども、やる気がでないのだ。ただでさえ日々のアレの世話と家事、さらには仕事で忙しいのに、そんなもののために時間を割きたいと思えるか？ いや私は無理だ。私には到底無理だと思える。

そうやって言い訳を並べて1週間がたったある日、そう、それはアレを保育施設に預けた後、少し違う道で仕事場に向かっていた、土曜日のことであった。

私はいつものように、少し違う道でお気に入りの自転車を漕いでいた。左、右、左、右……。

すると、どこからか心を掴むかのような音色が、私の耳に転がり込んできた。かすかに聞こえる程度であったものの、私は確信していた。これはバッハのコラールだ、と。その音色に誘われるように、私は自転車のペダルを漕ぎ、漕ぎ、また漕いだ。

*

そう続けていくと、私は現代風に建てられた白い建物にたどり着いた。ここはどこだろう。そう思ってふと上に視線を移すと、青空に輝く、銀色の十字架の輝きが私の目に飛び込んだ。

建物の前に自転車を止めつつ、私はここが教会であることに気がついたのだった。また同時に、さっきかすかに聞こえていた音が、今では鮮明に聞き取れるほどに近くなっていることに気がつく。耳馴染みのあるそのメロディは、紛れもなく147番だ。

そうして私は少しの間、耳を傾けていたのだが、少しの違和感を覚えた。拍や音節、ニュアンス等は私が知っているものと似通って聞こえるのに、歌詞だけが明らかに知っているものと違う。何かきっかけを探していた私は、チャンスだと思いきその音の元へさらに近づいてみることにした。

*

私の耳は間違っていなかった。教会の中に入った私の耳に飛び込んだその音は、紛れもなく日本語の歌詞だったのだ。

私は驚愕した。それと同時に、1週間以上抱え込んだモヤモヤがなくなって、さらに心が満たされるような気分になった。

私はクリスチャンではない。だからこの歌詞に共感

するはずなんてない、のだが。その明らかな生命の力と、その眩いほどの輝き。喜びと何かの大きな力に圧倒される。今まで何度も聞いてきたその曲は、まるで違う曲かのように私の胸を打つ。

それはまるで、幼い頃、クリスマスの朝に靴下の中から何かを取り出したときの気分によく似ていた。

*

18時を過ぎる頃、私はアレと共に帰宅した。やけに仕事が捗ったので久しぶりに定時に上がることができた、というわけだ。

私はやけに気分が良いので、アレの好物である肉ジャガを作ることにした。安月給な私が、牛肉を買うなど滅多にないのだが、気分が良いのだから仕方ない。得意な言い訳を並べつつ、ジャガイモに包丁を入れる。

スーパーで半額だった白滝の袋を開けていると、アレが足に絡みついていた。包丁を持っていない時でよかった。そう安心して、少しばかりこちらから話してみることにした。

どうやら白滝を見るのが初めてのようだ。最近やっとシンクの中を覗けるような背丈になったようで、こういうことは結構あるのだが、今日はいつも見ないようなものが並んでいるからか、やけにテンションが高い。

少しばかりなんの意味もない会話を続けたが、どうやらアレは絵を描きたいようで少し離れたテーブルへと駆けて行った。そんなに急がなくてもいいのに(笑)。

そう思いつつ、私は安心してまな板へ向かった。すると、アレが遠くから話しかけてきた。

驚いた。いつの間にかアルファベットを読めるようになっていたのだ。今は包丁を持っているから絡みつかないように、と注意をしつつ。

アレは少し気になっているようだったから説明を試してみた。それが驚くほど簡単に説明できた。

歴史や背景だけでなく、また音程や発音だけでなく、その意味を説明できた。私は、後で曲を流してあげるよ、なんなら歌ってあげるよ(笑)、と軽い口約束をして、私は充実感を持って料理を終えた。

*

料理が終わって、食卓には料理が並んだ。

少し待つように伝え、私は書斎からCDを持ち出してデッキで再生する。いつもは何もわからず聞いているその歌は、全く違って聞こえた。意味がわかるのはそうなのだけれど、まるであのときの喜びをまた与えるように、その音は私の胸を高揚させる。

どうやらアレも気に入ったようだ。

聖夜まであと2日。白髭の御老人は、今年もまた赤鼻のトナカイを引き連れて、喜びを与えるだろうか。そうであると願いたいな(笑)。

*

この物語はフィクションです。実際に存在する団体と関係するかもしれませんが、特定の個人とは関係ありません。

メリークリスマス (12/22のあまねより)。

◆筆者・椿周さんは、現在、桐朋学園音楽部門在籍の17歳。オーケストラ(A.R.S.)のチェリストとして中学2年で初めて参加(長野県・小布施公演、2019年)して以来、当団の公演に欠かす出演。コンティヌオ奏者としての安定感と技量には定評があります。ご両親とも同オケメンバー(オーボエ)。当稿では、“母語”を客観視した瞬間の感動を語ってくださった。BWV 147のコラール(第6曲、第10曲)の原詞と訳詞は、次ページ脚部URLより参照。

創立 60 周年の 1 ページに在籍して

大切 幸一（後援会員・元団員）

東京バッハ合唱団創立 60 周年おめでとうございます。

先日 [昨年 10 月 23 日]、NHK ラジオ第 2 放送で大村先生の「バッハのカンタータと 60 年」を聞かせて頂きました。私も創立 60 周年の 1 ページに在籍させていただいた事を大変誇りに思います。

思い返せば《ロ短調ミサ曲》を歌いたくて東京バッハ合唱団に入団し、小田急線の経堂駅を下車して練習場に通い、帰りは経堂駅近くの「カフェハウス・バッハ」に寄ってコーヒーを飲んで帰宅する。短期間でしたが、その頃を思い出して大変懐かしく思いました。後援会の一員として、これまで毎回定期演奏会のたびに祝電をうって応援していましたが、今後は形を寄付に換えてつづけるつもりです。僅かですが定期演奏会の足しにしていれば幸いです。

話は変わりますが、私はこのところ我が国日本の将来について大変危惧しています。集団的自衛権の成立以来、日本は戦争する国になるのではないかと疑念を抱いていたのですが、今回政府の敵地を攻撃できる武器を揃えるとのことで現実味をおびてきました。

私は現役の時、広島に 5 年ほど赴任しておりましたが原爆資料館で見た悲惨な状態を今でも忘れることはできません。二度とこの様な悲惨な戦争を起こしてはならないと思いました。それと、原子力発電所の方針転換です。当初原子力発電所は徐々に減らして行く方針だったと思いますが、福島第一原発事故の教訓をも忘れて原子力発電所の新規建設 40 年 60 年超の原発も安全検査に合格できれば運転できる方向に転換しようとしています。火山そして地震の多いこの国の何所に安全な場所があるのでしょうか。安全だと思っても想定外のことが起こります。福島第一原発事故の津波もそうでした。

火力発電は CO2 を排出するし、原発を可動させなければ電力が足りなくなると言うことが理由らしいですが、わが国の技術を駆使して火力発電から CO2 を排出しないようにできないのでしょうか。それと全国にあるゴミ焼却場で発電できないのでしょうか。そうすれば原発に頼る必要も無くなるのではないかと思います（これ等は私の希望ですが……）。取り止めの無いことを書いてしまいましたがお許し下さい。

それから毎回、月報を有難うございます。なかでも『退屈するのはいそがしい』は楽しみにしています。

これからの「東京バッハ合唱団」の更なる飛躍を祈願しております。大村先生も「東京バッハ合唱団」を率いて行くのは大変だと思いますが、増々のご活躍を祈ります。

（京都府木津川市在住）

— 第 122 回定期演奏会 —

[日時] 2023 年 5 月 6 日（土）14:00 開演

[会場] 川口ロリア音楽ホール

カンタータ第 12 番《泣き 歎き 憂い 迷い》
カンタータ第 22 番《イエス 十二弟子呼びて言いたもう》
昇天節オラトリオ《頌めよ 神のみ国》BWV 11

光野孝子(S)、谷地畝晶子(A)、鳥海寮(T)、小藤洋平(B)
管弦楽: A R S (コレギウム・アルモニア・スペリオレ・ジヤパン)
オルガン: 田尻明葉、合唱: 東京バッハ合唱団
指揮: 大村恵美子

チケット発売中: 全席自由 3500 円 (当日売り 4000 円)

＜後援会員の皆さま、ご招待＞

後援会員の皆さまには、特典として、いつものようにご招待状をお送りします。3 月までにはお手許に届くよう準備中ですので、ぜひご予約してお待ちください。

[既刊楽譜] 作曲アイディアの素材から見渡してみる

バッハ・カンタータの情景 № 14

大村 健二（団員）

残念な弟子たちのフーガ（BWV 22、第 1 曲）

月報紙面に空きがあるときに、不規則な連載をつけています。

次回公演の演目 3 曲（上記）についての紹介を始めましたが、昨年の 10 月号・11 月号で BWV 12 と BWV 22 について触れたまま、BWV 11 を残していました。出番ではありますが、スペースが半端ですので、つぎの機会をお待ちいただき、ここはウメクサです。

さて年が明けて、5 月公演に向け、いよいよ準備にも力が入ってきました。そんなある日の練習の折、BWV 22 冒頭曲の中の〈弟子らされど何をも知らず 悟らざりき 主のみ言葉を〉という 4 声の合唱フーガの進行を止めて、指揮者が訊ねました：この歌詞を語っているのは誰ですか？

迷うまでもなく、ルカと呼ばれる福音書記者が正解です（ルカ 18 章 31-34 節）。〈イエス、十二弟子呼びて言いたもう〉と語りだす、独唱テノールに託された段落の結論部分。11 月号（No. 725）にも記したとおり、このフーガは、師であるイエスの〈み言葉〉（死と復活の予告。独唱バスのアリオーゾ）に狼狽する弟子たちの「ワサワサ、ガヤガヤ」を描写したものでしょう。

ところで、バッハ当時の上演の様子を想像してみました。トマス学校聖歌隊の 1 編成は、ボーイソプラノ・アルティスト（男声アルト）・テノール・バスの 4 声部各 3 人の少年たちで構成されていましたので、3 人×4 声部=12 人が、コワイアボックスにひしめいて、〈弟子らされど……〉のテーマを、S→A→T→B の順に歌ったり、ひっくり返したり、あっちに行ったりこっちに来たり、の挙句に〈主のみ言葉を〉に落ち着くのです。

バッハの企みはいつも愉快です。お楽しみに。

パリの憂鬱

安曇野閑人 大野 博人

「ついにパリを出ちゃった」

この年末年始、フランスの友人たちからあいついでそんな知らせが届いた。

現役から退くときを迎え、旧知のパリジャンやパリジェンヌたちが、それまで暮していた市内や郊外の家やアパートマンを引き払い、田舎に移住したというのだ。

すでに数年前にパリを去った知り合いたちからも「移住先で快適に過ごしている」と、ご機嫌な便り。

もともとパリに住まいがあった連中だ。引退後も花の都で暮し続けることはできたはず。にもかかわらず、その生活を捨てたという。

パリのジャーナリスト学校で同級生だったパトリシアはノルマンディーのグランヴィルという町に数ヶ月前に移住した。

コロナ禍で外出できなくなったときに、パリを離れてこの街に滞在したのが引き金になったという。17世紀の街並みが残る高台の家の窓の外に、英仏海峡が広がる。

「その眺めに息をのんだ。まるで自分がターナーの絵の中にいる気がした」

その写真もたくさん送ってきた。海と空と雲が織りなす色彩の変化が水平線まで続く。

その光景に一目惚れして、パリの喧噪から離れて移り住むことを決めたそうだ。

彼女は文化専門の雑誌記者をしたあと、ルーブル美術館や財務省関係の役所などに勤め、退職年齢になった。「ここには劇場も映画館も音楽会もあって文化も豊か」といい、パリに未練はなさそうだ。

私も安曇野という田舎に移住して音楽を楽しんだり、畑を耕したりしている。そのことを知らせたら「私も畑仕事を始めようと考えている。1万キロも離れていて同じようなことをしているのがおかしいね」と返事が来た。

通信社の記者で東京特派員もしたことがあるジャックは1年あまり前から、南西部のトゥールーズに夫婦で移り住んだ。70歳。特派員として外国経験は豊富。フランスではパリにしか住んだことがないが、すぐになじんだようだ。

山歩きを楽しみ、シャモニーにも行ったという。

クロードは、パリの新聞社で記者の仕事の続けなが

ら、住まいを北部の都市リールに移した。「パリは君が知っているような街ではなくなったんだ」という。リールは工業都市として栄えながら、その後は深刻な衰退も経験した。しかし、今はずっと美しくなり、文化的にも活気があるそうだ。

「それに、パリは物価が高くなりすぎている。とくに若い人には住みにくくなっている」。リモートワークでかなりの仕事がこなせるようになった今、人々が地方に出て行く流れは続くのでは、という。

ほかに、元外交官夫婦やビジネスマン夫婦からも自然の豊かなブルターニュに住まいを移したという近況報告が届いた。

フランスからのそんな便りにちょっと驚いていると、長野県内への転入者が転出者を久しぶりに上回ったというニュースが流れた。コロナ禍の都会での息苦しさでリモートワークの普及が背景にあるようだという。

ジャックはトゥールーズからのメールに、こう書いていた。

——コロナ禍だけでなく、ウクライナでの戦争や政治の無力などのせいで、社会全体に「芥川龍之介が語っていたようなぼんやりとした不安の広がり」を感じる——。

「ぼんやりとした不安」が日々よどんでいくなか、政治、経済、文化の中心である大都市はもうそれをはね返す活力を失っていて、アイデアも示せない。それどころか、むしろ地方よりも深く危機に苦しみ、むしろまれているようにも見える。

中央政府は市場の迷走や暴走に打つ手がなく、街は感染症でにぎわいを奪われた、人々は戦争で経済的にも心理的にも疲れ果てている、癒やしとなるはずの音楽界などのイベントも思うように開催されない……。

先日、上京したとき、新聞社時代の記者仲間4人と会った。みんな同じような年齢だ。そのうち1人はすでに地方への移住を決め、都内のマンションを売り払った。外の2人は迷いながらも地方での暮らしに惹かれているようだった。少し前までは、定年後も都会に住み続けるというライフスタイルはあたりまえだった。それに疑問符がついている。

私たちの年代の価値観の変化に過ぎないのだろうか。それとも近代社会を支えてきた大都市が今、その主役の座を降りようとしているのだろうか。

(団友・後援会員、元朝日新聞記者)

■上掲：パトリシアが送ってきた写真。「ターナーの絵の中に見えるような」気分させてくれる光景。これならパリを捨てても惜しくない(筆者)

